

子どもの具体的な姿をもとに語り合う授業研究

～抽出児活用による教師の語りの変容～

18AX010

玉虫 麻衣子

1. 学校の現状と課題

A小学校では、9年間生活科・総合的な学習の時間の研究に取り組んでおり、子どもの姿に着目した授業研究を行うために、抽出児の活用に取り組むこととなった。抽出児のもつ「関連追及機能」(田上哲,2009)により、他の子どもの姿をとらえることにつながり、教師の手立ての振り返りもできることが期待されるが、第1,2回の事後協議会では抽出児について語られたのは1回のみであり、その状況を教師は抽出児を活用できていないと捉え、何らかの手立ての必要性を感じていた。

2. 研究の目的

本研究では、抽出児を中心とした「子どもの具体的な姿」をもとに授業を振り返る事後協議会を実現させるべく、研究主題を具体化した「学校として目指す子どもの姿」の共有と抽出児設定の視点の明確化を図り、それを手がかりに抽出児を設定することを目指し、推進委員会での検討や研修会の実施を通して抽出児の活用方法について検討・共有したことをもとに、その後の授業研究会を改善し、その効果を検証することを目的とする。

3. 課題解決の方法

抽出児を設定することができるように「学校として目指す子どもの姿」の共有化を図り、抽出児を活用するための方法を検討・共有するために、研修会において3つのことに取り組んだ。1つ目は、研修会の目的の一つである研究主題を具体化した「学校として目指す子どもの姿」の設定である。2つ目は、抽出児の設定の視点の明確化である。3つ目は、抽出児を活用するための方法検討である。事前検討会、研究授業、事後協議会それぞれの段階において、改善を図ることが必要であると考えられることから、どの段階においてどのような取り組みができるのかを具体的に検討した。それらをA小学校で共有し、その後の授業研究での取り組みに活用した。

4. 結果と考察

本研究の結果、抽出児設定の改善と抽出児の活用の手立ての実践により、「子どもの具体的な姿」をもとに語

り合う事後協議会が実現された。「学校として目指す子どもの姿」と抽出児を設定する視点を明確にしたことにより、教師が意図的に抽出児を設定することを促したことが明らかになった。また、事後協議会における教師の発言の分析から、抽出児を活用することで、「子どもの具体的な姿」の発話数、発話者がともに増え、教師のより深い気づきを促す発話が表れるようになったことが示された。授業研究において抽出児を活用するためには、授業者が単に数人を選出するだけではその効果が機能せず、授業者が抽出児の「期待する変容」を具体的に想定しながら意図を持って設定すること、そしてそれらを非授業者と共有し、非授業者にも手立てが必要であることが明らかになった。

本研究を通して、研究主題を具体化した「学校として目指す子どもの姿」の基盤となるものを作成できたのは一つの成果である。しかし、抽出児の設定のための「学校として目指す子どもの姿」が全ての授業研究において活用されていたとは言えないことから、その作成した資料の妥当性は今後も吟味していく必要がある。今年度1年間の授業研究の振り返りと、学習指導要領を踏まえた上で、これからもさらなる改善を図り続けることが必要なものであるとも考えられる。また、研修前と研修後の教師の発言の変容から、教師が「子どもの具体的な姿」をもとに自分の言葉で解釈を語ることで、「教育的瞬間」

(VanManen,1991)をとらえる教師の語りや新たな視点(秋田,2014)を得られことも確認された。そして、全体発言数自体の増加も確認されたことから、抽出児の活用が事後協議会の活性化に大きく寄与したと言える。

引用文献

- 田上哲 2009 授業研究における抽出児に関する基礎的考察 九州大学大学院教育学研究紀要 第11号
VanManen,M 1991 Reflectivity and the pedagogical moment. Journal of Curriculum Studies, 26 (6)
秋田喜代美 2014 対話が生まれる教室 教育開発研究所